現状整理

世界を意識する社会・大学、海外への関心が低い日本の若者

グローバル化の進展に企業や大学はどのように対応しようとしているのだろうか。グローバル人材の今後の需要動向、若者の海外志向や大学の対応を、データを基に整理する。

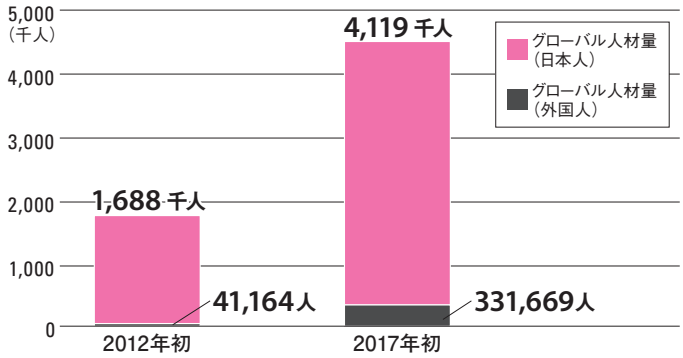
図1は、企業の「グローバル人材」に対するニーズを聞いたアンケートを基に、グローバル人材の需要量を推計した結果だ。2017年には、グローバル人材需要量は約412万人になり、12年と比較して約250万人の増加が見込まれている。社会では、確実にグローバル人材の需要が高まるといえる。

図2を見ると、グローバル化への対応として、大学が学生の留学支援を強化しようとしていることが分かる。特に国立大では、その8割が「海外に留学する学生を増やす方針に基づき、実行策を検討している」と答えた。

一方、若者の意識を見ると、社会の状況や大学の施策の変化に対応しきれていない点もありそうだ。図3

図1 グローバル人材需要量の将来推計値

1-1 グローバル人材量と、そこに占める外国人のグローバル人材量の将来推計値



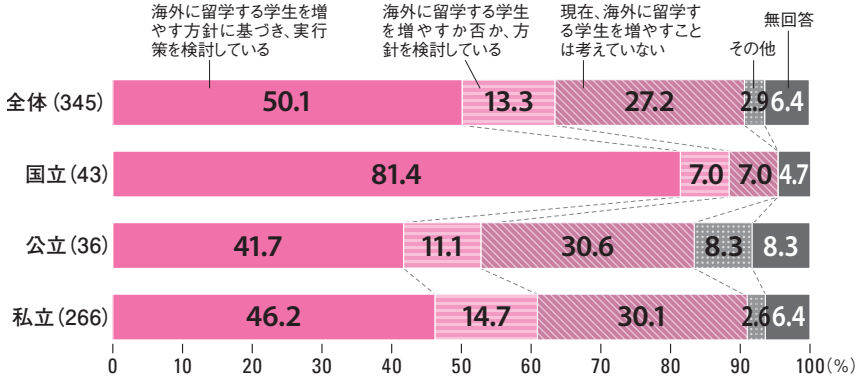
1-2 企業規模(常用雇用者数規模)別のグローバル人材需要量発生率

常用雇用者数	グローバル人材需要発生率（全体）	
	2012年初	約5年後
299人以下(50～299人)	5.6%(N＝515)	7.2%(N＝366)
300～1,999人	6.9%(N＝223)	8.7%(N＝132)
2,000人以上	11.0%(N＝63)	17.8%(N＝28)

＊企業アンケートの調査票において「グローバル人材」とは、以下の①②③の全てに該当する者とした
①現在の業務において他の国籍の人と意思疎通を行う必要がある
②①の意思疎通を英語で（あるいは母国語以外の言葉で）行う必要がある
③ホワイトカラー職（現行の日本標準職業分類における大分類A～D［管理的職業従事者、専門的・技術的職業従事者、事務従事者、販売従事者］を指す）の常用雇用者である
出典／経済産業省調査事業「大学におけるグローバル人材育成のための指標調査」

図2 大学の留学生送り出しの方針

Q. 貴大学の国際化の一環として、留学生の送り出しに関しては現在どのようにお考えですか



＊対象は、英語担当教員責任者345人。（　）内はサンプル数
出典／Benesse教育研究開発センター「大学における英語教育の改革等に関する調査」(2009)

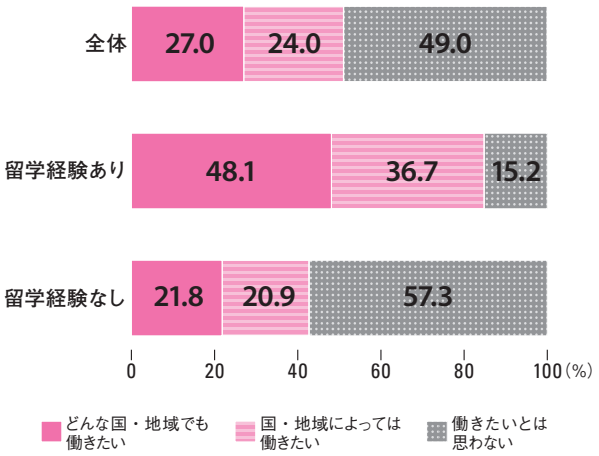
は、新入社員に海外勤務の志向について尋ねた結果だ。「海外で働きたいとは思わない」と答える新入社員は全体で約5割に達する。ただし、その意識は一律ではなく、留学経験がある新入社員は海外志向が高い。経年変化を見ると、「どんな国・地域でも働きたい」と思う新入社員が増える一方で、「働きたいとは思わない」と思う新入社員も増えている。

留学生送り出しを進める上での課題を大学に尋ねた結果が、図4だ。経済的な問題や就職活動とのかねあいなど、個人では解決できない問題に続き、「学生の海外への興味・関心が低下している」点を、回答者の約4割が問題視している。グローバル化が進んでいるにもかかわらず、学生の意識は海外に向いていない。

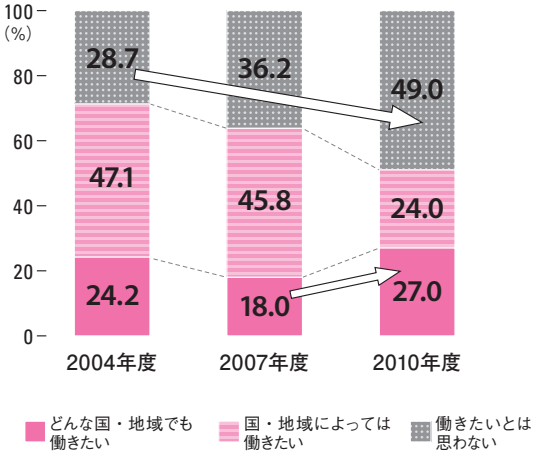
企業や大学がグローバル化に対応しようと具体的に動いている中で、高校はどうすればよいのだろうか。生徒が世界に目を向けて主体的に「世界に生きる」ためには、どのような力を育めばよいのか。次ページから考えていきたい。

図3 新入社員の海外勤務の志望状況

Q. 今後、海外で働きたいと思うか（2010年度）



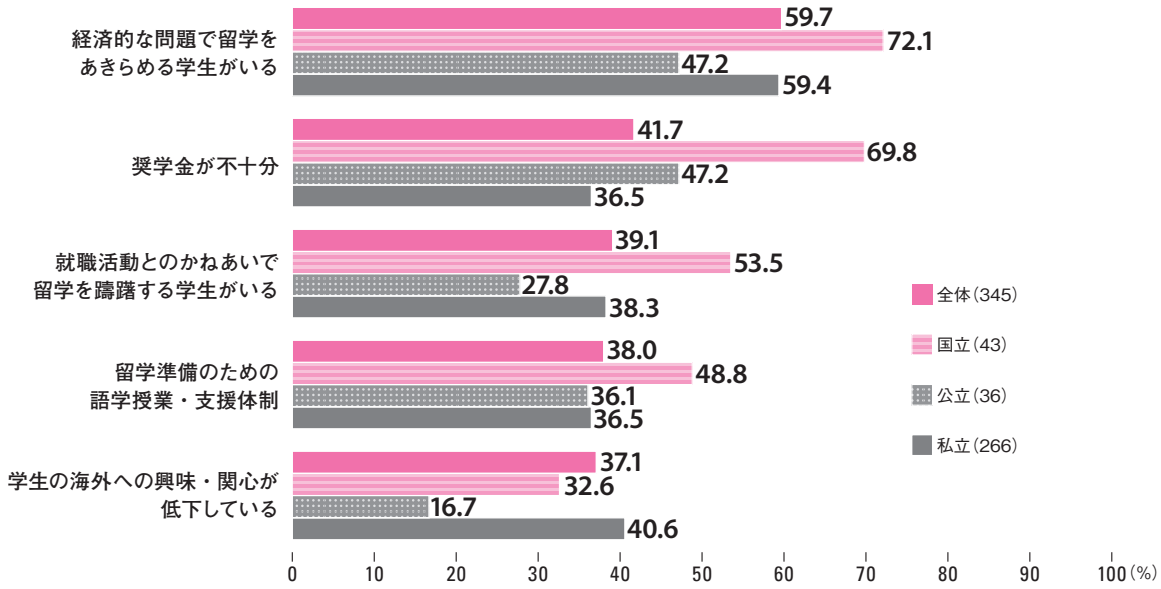
Q. 今後、海外で働きたいと思うか（経年比較）



＊対象は、2010年度に新卒入社した新入社員（18～26歳）400人
出典／産業能率大「第4回新入社員のグローバル意識調査」（2010年7月）

図4 留学生送り出しの課題

Q. 貴大学にとって、留学生送り出しの課題は何でしょうか



＊複数回答　＊対象は、英語担当教員責任者345人。（　）内はサンプル数
出典／Benesse教育研究開発センター「大学における英語教育の改革等に関する調査」（2009）